九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

「国際朱子学会議」に参加して

柴田, 篤
九州大学

https://doi.org/10.15017/18136

出版情報：中国哲学論集. 18, pp.81-90, 1992-10-10. 九州大学中国哲学研究会
バージョン：
権利関係：

《学界消息》

「国際朱子学会議」に参加して

柴田　篤

一九九二年五月二十九日(金)から六月一日(月)まで、台北市にある中央研究院学術活動中心(センター)を会場として、「国際朱子学会議」(International Conference on "Chu Hsi Studies")が開催された。主催は中央研究院中国文哲研究所籌備處、並びに中華文化復興運動総会である。参加者は台湾はもちろん、中国、香港、韓国、日本、アメリカ、カナダ、オーストラリア、ドイツ、ロシア、と各国から、およそ延べ百数十人が集まった。日本からは、佐藤仁(久留米大学文学部)、福田殖(九州大学教養部)、馬淵昌也(専修大学経済学部)の三氏及び筆者が発表者として出席し、また陶長君(筑波大学文学部)、連清吉(九州大学文学部)の両氏が通訳を兼ねて参加した。

近年、中国の伝統文化(文学・哲学)に関する国際的な学会が頻繁に催されるようになったが、朱子学に的を絞ったものとしては、一九八二年にハワイで開かれた「International Conference on Chu Hsi」、一九八七年に福建省厦門市で開かれた「朱子学国際学術会議」、一九九〇年に福建省福州市と武夷山で行なわれた「紀念朱子誕辰八六〇周年国際学術会議」などが挙げられる。今回の国際会議の趣旨は、会場で配布されたプログラムの冒頭に、「会議縁起」として以下のように明確に述べられている。

東アジアの伝統文化の異同と交流の姿を明らかにするには朱子の研究が不可欠である。台湾では民国六十年前後、牟宗三の『心體與性體』や錢穆の『朱子新學案』が出版され、朱子学研究の気運が起きたが、研究が分散し哲学観念の疏釈に偏っていた。そこで、今回の会議の目的は、次の二点である。一つは、朱子学研究が成果を挙げている今日、我々(台湾の学者)が持っている基礎に基づいて、更に海外の学者との交流を深め、彼らが発掘した新しい問題や使用している新しい方法を理解し、切磋の材料とするものである。もう一つは、それらを整理統合して新しい方向を打

ちだすことを重視し、各方面の研究者の協力を得て、それぞれの専門に基づき、朱子学の各方面の意義と価値を解明し、併せて各部門で継続して研究を深めるための基礎固めをすることを希望するものである。

以上の目的で企画された本学会は「研討主題」（研究テーマ）として、次の五つを掲げている。

一、朱子の哲学
二、朱子の文学
三、朱子のその他の人文思想
四、朱子学の源流
五、朱子の伝記と文化的背景

これを見ると、朱子その人とその思想を主題としていることがわかる。朱子の後継や後世における影響、また東アジア世界における展開といった、広義の朱子学に関する研究テーマをとり上げてはいない。もっとも、この「主題」は、開催時点で示されたもので、学会参加者に対する招請状には特に記されてはいなかった。つまり、発表者は朱子学というメインテーマの下、それぞれのテーマで会に臨んだわけである。

ところで、中央研究院中国文哲研究所籌備處は、一九八九年八月に設立され、「古典文学」「近代文学」「経学文献」「中国哲学」「比較哲学」の五方面の研究を行なっており、『中国文哲研究集刊』（年刊）『中国文哲研究通訊』（季刊）を刊行している。設所学術諮詢委員会主任委員兼籌備處主任の呉宏一教授が本学会の召集人であり、同研究所のスタッフが総力を挙げて、会議の準備・運営全般に当られたのである。

また、もう一つの開催母体である中華文化復興運動総会は一九九一年三月に設立され、「社会教育を推進し、固有の伝統を根ざしていき、更に学術研究を援助し、中華文化を高揚させる目的」（「会議縁起」）を持っている。会長は李登輝総統であり、初日、開幕式の中で、李総統の祝辞「国際朱子学会議開幕賀詞」が披露（代読）された。それによれば、本国際会議の意義は二つあり、一つは純学術的探究で、もう一つは現実的関心である。朱子の思想は知識と道徳の両面で現代人に相当豊かな啓示を与えるものである、とされる。そして祝辞は、「伝統を回顧することは、決して復古ということではなく、朱子の研究も全部をそのまま受け入れるというのではない。我々は『変化』と『創造』

の姿勢を持つのである。つまり、伝統を、現代人に向って絶えず沸き上がってくる一筋の活水とするのである。また我々は、この上もない忍耐力と注意力でもって（伝統を）玩味し、それが我々に開示している尊重すべき思惟を見るのである」と結ばれていた。李総統の本国際会議にかける意義込みが窺われる言葉であり、翌日の朝刊各紙は会議の報道の中で、こぞってこの祝辞を引用した。

さて、開幕式に引き続き、同じくセンター一階の大ホールで、アメリカ合衆国チャッタム大学名誉教授の陳榮捷先生が「主題演講」（基調講演）を行なった。題目は「論朱子〈観書有感〉詩」で、今年九十一歳の教授は、車椅子に座り、天眼鏡を手にして講演を始められた。十分ほどして、本会のスタッフの一人で議事班のチーフであり、教授の介添え役を務めていた鍾彩鈞副研究員が、代って教授の原稿を読み上げた。その間、教授は御自分の原稿の朗読にじっと聞き入っておられた。講演が終了した時の満場の拍手は、朱子学研究の数々の論著を世に問われ、今なお矍鑠として壇上におられる陳榮捷教授の存在そのものに対して贈られた賛辞であったように思われた。

午後から、研究発表が二会場に分かれて開始された。各会場で、二名の発表が合わせて行なわれ、主席（司会者）が全体の進行を行なう。主講人（発表者）が一人二十分の発表を行なった後、予め定められた講評人（講評者）が十分間、感想や疑問点、意見等を述べる。次にもう一人の発表・講評がなされてから、会場の参加者を含んだ自由討論が三十分間行なわれる。自由討論では、先ず司会者が発表・講評を取りまとめたのち、発表者が講評に応答し、それから参加者の質問や意見が出される、という場合が多かったようである。このように、二人一組の発表が二会場で同時になされ、これを一場として、四日目の午前中まで、計十二場が催された。以下に、発表者及び題目の一覧を挙げておく。なお講評者名は紙幅の都合で省略させていただく。

五月二十九日(金)

第一場

(一)主席…羅光（輔仁大学哲学系）

柳存仁（オーストラリア国立大学名誉教授）……「朱熹與参同契」

柴田篤（九州大学文学部）……「明清期的天主教與朱子学」

(二)主席…戴蓮璋（台湾師範大学国文学系）

張永儁（台湾大学哲学系）……「朱熹哲学思想之『方法』及其実際運用」

李弘祺（ニューヨーク市立大学歴史系）…「Neo-Confucian Education In Chien-yang, Fu-chien,1000-1400: Academy, Society and the Development of Civil Cuiture」

第二場

(一)主席…柳存仁（オーストラリア国立大学名誉教授）

韋政通（中国思想史学者）……「『慶元学禁』中的朱熹」

蔡仁厚（東海大学哲学研究所）……「朱子的工夫論」

(二)主席…張以仁（中央研究院歴史語言研究所）

林麗真（台湾大学中国文学系）……「朱熹論易『象』與易『理』」

林慶彰（中央研究院中国文哲研究所）……「朱子対伝統経説的態度—以朱子的詩経著述為例」

五月三十日(土)

第三場

(一)主席…成中英（ハワイ大学哲学系）

孫振青（東呉大学哲学系）……「朱熹的理気概念與亜里斯多徳的形質概念之比較」

李明輝（中央研究院中国文哲研究所）……「朱子論悪之根源」

(二)主…楊承祖（東海大学中国文学研究所）

陳其芳（福建師範大学哲学研究所）……「朱熹的親属」

Leonard Perelomov（ソ連科学院極東研究所）…「How Confucius Himself Understood Principle "he" and Whether Chu Hsi Succeeded in Conveying its Initial Meaning?」

(一)主席…黄錦鋐（台湾師範大学国文研究所）

高令印（厦門大学哲学系）……「朱熹與福建文化」

曾春海（政治大学哲学系）……「朱熹的政治思想」

㈡主席…項退結（政治大学哲学系）

成中英（ハワイ大学哲学系）……「論朱子哲学的理学定位與其内涵的円融和条慣問題」

Hoyt Cleveland Tillman（アリゾナ州立大学歴史系）……「『仁説』—朱熹與張栻論仁」

第五場

㈠主席…黄振華（中国文化大学哲学系）

佐藤仁（久留米大学文学部）……「朱熹敬説的一個考察」

黎建球（輔仁大学哲学系）……「朱子的認知理論」

㈡主席…唐亦男（成功大学中国文学系）

朱榮貴（米・ブリン・マー大学歴史系）……「Pluralism in the Chu Hsi School-As seen from Excerpts of Li Fang-Tzu's 李方子 Chronological Biography of Chu Hsi（Wen-Kung Nien-P'u）文公年譜 and his "Intellectual Biography of Chu Hsi"（Chu Tzu Shih-Shih）朱子事実」

鍾彩鈞（中央研究院中国文哲研究所）……「朱子学派尊徳性道問学問題研究」

第六場

㈠主席…何佑森（台湾大学中国文学系）

Monika Uebelhor（独・マーブルグ大学漢学系）……「How to Ensure the Confucian Govering of the People?」

古清美（台湾大学中国文学系）……「明代朱子理学的演変—從薛敬軒、羅整庵到高景逸」

㈡主席…黎建球（輔仁大学哲学系）

福田殖（九州大学教養部）……「朱熹的死生観」

馮耀明（香港中文大学哲学系）……「朱熹心性論新詮—一個分析哲学的観点」

五月三十一日(日)

第七場

(一)主席…楊惠南（台湾大学哲学系）

劉述先（香港中文大学哲学系）……「有関理学的幾個重要問題的再反思」

蒙培元（中国社会科学院哲学研究所）……「朱熹的心霊境界説」

(二)主席…葉慶炳（台湾大学中国文学系）

王靖献（香港科技大学人文学部）……「朱子《九歌》創意」

張健（台湾大学中国文学系）……「朱子奉同張敬夫城南二十韻析論」

第八場

(一)主席…高明（政治大学中国文学研究所）

尹絲淳（高麗大学校哲学系）……「韓国性理学與天命思想」

黄俊傑（台湾大学歴史学系）……「朱子対中国歴史的解釈」

(二)主席…沈清松（政治大学哲学系）

李愛熙（江原大学校哲学系）……「朱熹的人物性論」

董金裕（政治大学中国文学系）……「朱熹的気強理弱説及其地位」

第九場

(一)主席…周何（台湾師範大学国文学系）

崔根徳（成均館大学校儒学科）……「朱子家礼在韓国之受容與展開」

蔣義斌（中国文化大学史学系）……「朱熹的楽論」

(二)主席…王靖献（香港科技大学人文学部）

黄景進（政治大学中国文学系）……「朱熹的詩論」

陳昭瑛（台湾大学外国文学研究所博士班）……「朱熹《詩集伝》中的文学社会学」

第十場

㈠主席…黄俊傑（台湾大学歴史学系）

宋錫球（東国大学校哲学系）……「栗谷的朱熹批判—以人心道心説為中心」

楊祖漢（中国文化大学哲学系）……「李栗谷対朱子哲学的詮釈」

葛榮晉（中国人民大学哲学系）……「朱熹的実学思想」

㈡主席…王甦（淡江大学中国文学系）

郭信煥（崇實大学校哲学系）……「朱熹的理学自然観」

東景南（蘇州大学中国文学系）……「朱熹、玻爾與太極図—通向二十一世紀的科学革命」

六月一日(月)

第十一場

㈠主席…李弘祺（ニューヨーク市立大学歴史系）

姜允明（澳・マクウェイリー大学近代語系）……「試論朱子的『心学』及其現代意義」

Conrad Schirokauer（ニューヨーク市立大学名誉教授）…「Hu Yin's "Recounting the Past in a Thousand Words"-A Little History Primer Praised by Chu Hsi（胡寅的《叙古千文》—朱熹所推崇的一部歴史初階）」

㈡主席…王邦雄（中央大学哲学研究所）

何寄澎（台湾大学中国文学系）……「朱子的文論」

張立文（中国人民大学哲学系）……「未発已発論之縦貫—朱子参究未発已発論之挫折、転変和影響」

第十二場

㈠主席…姜允明（澳・マクウェイリー大学近代語系）

陳俊民（浙江大学哲学系）……「論朱子的『聖賢』人格理想」

陳來（北京大学哲学系）……「朱子淳熙初年心説之辨」

㈡主席…邱燮友（台湾師範大学国文学系）

馬淵昌也（専修大学経済学部）……「孫作的思想與朱子学」

姜廣輝（中国社会科学院歴史研究所）……「朱熹哲学餘論」

以上は、プログラムに掲載された発表者名で、このうち、第十場㈠の葛榮晉、同場㈡の束景南、第十一場㈡の張立文、第十二場㈠の陳來、同場㈡の姜廣輝の各氏は出席できず、実際の発表はなかった。また、次に挙げる諸氏は、題目だけ提出され、開会時点で欠席がわかっていた方で、蔣年豊・呉長庚の両氏は論文は提出されていた。

饒宗頤（香港中文大学中国文化研究所）……「朱熹在散文史上地位之評定—唐宋八家朱熹応占一席論」

高橋進（筑波大学名誉教授）……「『格物致知』與『実事求是』歴史的、比較論的考察」

秦家懿（トロント大学ヴィクトリア校）……「朱熹與道教」

蔣年豊（東海大学哲学系）……「従朱子與劉蕺山的心性論分析其史学精神」

呉長庚（上饒師範専科学校歴史系）……「朱子先人世系略考」

韓鍾文（上饒師範専科学校中文系）……「朱熹與錢穆思想散論」

張玉奇（上饒師範専科学校中文系）……「論朱熹中庸学説」

なお、発表者は一ヵ月前までに予め二万字以内の論文（中国語又は英語・日本語）と五百字以内の中国語の要旨を提出しなければならず、提出論文は複写され一人分づつ表紙を付けて綴じられ、発表の前に参加者全員に配布されていた。

さて、以上のような研究発表が行なわれた後、最終日の午後二時から一時間、「綜合討論」が劉述先教授（香港中文大学哲学系）の司会で行なわれた。様々な感想や意見が出されたが、今回の会議の運営に関しては一様に高い評価が与えられていた。続いて閉幕式が行なわれ、四日間に亙る国際会議の幕が降ろされたが、参加者には翌朝、総督府における李登輝総統との会見が用意されていた。終始和やかな雰囲気の中で進められた会見の中で李総統は、二年後に再度国際朱子学会議を開く意向があることを示した。

最後に、筆者の感想を思いつくまま二三述べて、本報告を終りたいと思う。

先ず、最初にも触れたが、発表者招請の時点では、開催目的や研究テーマの骨子といったものが示されていなかったので、各発表の内容が必ずしも所謂研討主題とは一致しなかったという面があった。しかし、逆に言えば、だからこそ各人が思い思いのテーマで発表に臨むことができ、結果的にバラエティーに富んだ研究発表になったともいえる。ただ、広義に朱子学を全体的に把握しようとするならば、たとえば仏教（禅学）や陸王心学との関係、あるいは日本における展開などについても発表が欲しかったところである。また、せっかく朱子学関係の研究者が集まっているのだから、いくつかのテーマに分けて懇談会のような形でも持てたら良かったかもしれない。更に欲を言えば、台湾所蔵の朱子学関係の文物（書籍・書画等）の展示などがあれば、より楽しめたかもしれない。もっとも、学会記念として印刷され、参加者に配られた『晦翁翰墨』（中央研究院中国文哲研究所籌備處発行）は、朱子の像や手跡、関連遺蹟の写真が一七五頁にわたって収められており、大変参考になるものであった。ただ、以上のことは、今回の会議の成功について何ら異議を唱えるものではもちろんない。主催者側スタッフは、最初から最後まで、議事運営はもとより、参加者の生活面に至るまで実に細やかな行き届いた対応を行なっていた。また『晦翁翰墨』と共に参加者に配られたものに『朱子学研究書目』（林慶彰主編、許維萍・馮暁庭編輯、文津出版社刊）があった。これは、一九〇〇年から一九九一年までに、台湾・中国・日本・韓国・アメリカ等で発表された朱子学関係の著書・論文の目録である。内容ごとに分類しており、今日まで作られた類書の中では最も詳しいもので、今後の朱子学研究に大いに被益するものといえる。同書の「学術会議論文」の項では、ハワイから今回までの四回の国際会議の発表題目が収録されている。

今回の学会は、題目一覧でも解るように、哲学・文学・歴史のそれぞれの分野から発表が行なわれた。このように朱子学に関する様々な研究者が一堂に会して、交流できたことは、各自の今後の研究に刺激を与えたという意味でも、それなりに十分意義深いものであったといえよう。主催者のねらった「目的」が生かされたといえる。発表された論文は、改めて発表者の手を経た上で、論文集としてまとめられ、来年にも刊行される予定である。成果が世に問われ、また広く共有されることになる。

最初に挙げたように、この十年で都合四回朱子学に関する国際会議が開かれたわけだが、朱子学をテーマとした学会が、関連性を持って企画され、また積み上げられているとは必ずしも言えないようである。今後ますます盛んになっ

ていくであろう国際学会の在り方を考える上で多くの課題があるといえよう。しかし、ともかく十年で四回、開催地を異にして、それぞれ独自に行なわれてきたこと自体、現在における朱子学研究の多様性と今後の可能性を示唆しているように筆者には思われる。

【附記】従来の朱子学関係国際学会については、次のものが参考になる。

(1) ハワイの学会については、発表論文がまとめられ、次の書物が出版されている。

『Chu Hsi and Neo-Confucianism』University of Hawaii Press, 1986.

(2) 厦門市の学会については、「東洋の思想と宗教」第五号（一九八八年六月、早稲田大学東洋哲学会発行）に〔海外学界動向〕として、土田健次郎氏が報告を書いておられる。

(3) 福州市の学会については、「東洋の思想と宗教」第八号（一九九一年六月、早稲田大学東洋哲学会発行）に〔海外学界動向〕として、垣内景子氏が報告を書いておられる。